

## 第41回海外研修航海における研修学生の余暇意識の動向

北濱 幹士\*・橋本 敏明\*\*

(受付 2010年9月9日)

(受理 2010年11月1日)

### Leisure Attitude Trends in the 41<sup>st</sup> Tokai University Overseas Educational Cruise

by

Kanji KITAHAMA\*, Toshiaki HASHIMOTO\*\*

#### Abstract

The purpose of this study is to measure the trends of leisure attitudes within the participating students who are enrolled in Tokai University, and Tokai University Fukuoka Junior College of the 41<sup>st</sup> Tokai University Overseas Educational Cruise. The analysis, compares the result of the “Yoka Anketto”(Survey of Leisure Attitude) in the pre-cruise orientation program (1 survey), the actual educational cruise (7 surveys), and the post cruise survey (1 survey). The data shows that the students' leisure attitudes were negative in the first survey during the actual cruise program, but became increasingly positive as the program progressed. Both female and male students' leisure attitudes became more positive as a consequence of the cruise.

**Keywords** : Leisure attitude, Educational cruise, BOSEI MARU

#### 1. はじめに

海外研修航海は、東海大学海洋調査研修船「望星丸」を使用し、南太平洋上の島々を巡る学校法人東海大学が独自に行っている研修プログラムである。第41回の航海は、2010年2月14日より2010年4月4日の50日間に渡り行われた。

研修の目的は、「学校法人東海大学の海洋調査研修船を使用し、海外の諸文化・諸事情に触れ、実体験を通して、国際的視野に立った世界観・人生観の確立を目指す。また、船内という限られた生活環境の中での共同生活を通して、人間形成をはかること。」<sup>1)</sup>であり、海洋調査研修船(望星丸)を洋上キャンパスと位置付け、「学園傘下の高等教育機関から参加した学生が団役員とともに共同生活を営み、英会話講座や洋上講座、寄港地に関する調査・発表、天文クラブ・音楽クラブ等学生主体のクラブ活動や、救命救急訓練を行う。また、赤道祭や洋上卒業式などの様々な行事を団役員とともに創り上げる。寄港地では、大学訪問、班別グループ研修、寄港地の人々を招く船上交流会を行う。」<sup>1)</sup>ことが研修内容である。

本海外研修航海の参加学生(以後、研修学生)は、東海大学・東海大学短期大学部・東海大学医療技術短期大学・東海大学福岡短期大学の在学学生並びに東海大学への留学生より、申し込み、選抜された学生97名(男性62名、女性35名(内留学生4名(男性3名、女性1名)))である。

第41回海外研修航海の航海日程は、2010年2月14日に静岡県静岡市の清水港より出港し、ポンペイ(ミクロネシア連邦)、フナフティ(ツバル国)、ポートビラ(バヌアツ共和国)、ヌメア(フランス領ニューカレドニア)、コスラエ(ミクロネシア連邦)の5島4カ国に寄港し、2010年4月4日に清水港へと帰港した(図1)。

本研究では、北濱の第39回海外研修航海についての先行資料を基に<sup>2)</sup>、海外研修航海の目的でもある「限られた船内生活環境、そして共同生活から成される人間形成」に注目し、海外研修航海に参加する事で研修学生にどのような余暇意識の動向が見られるかに焦点を置き、第41回海外研修航海に参加した研修学生の余暇意識の動向を事前研修、研修航海、そして、下船後の事後調査までを通して調査する。

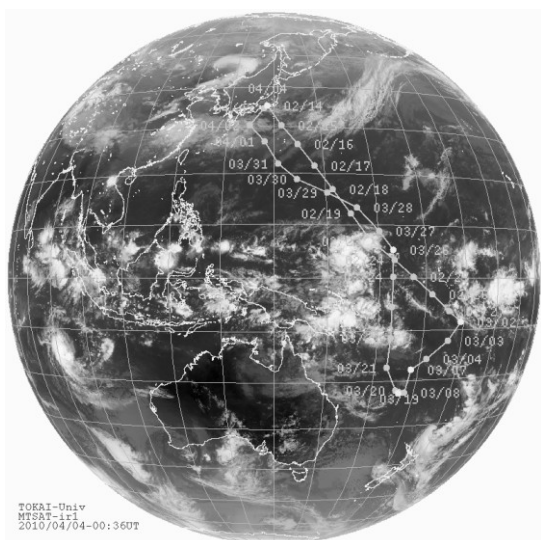


図1— 気象衛星ひまわり6号の画像で見る望星丸の位置と周辺の状況

## 2. 第41回海外研修航海の概要

海外研修航海は、毎回異なった日程、航路、寄港地が予定されているが、海峡状態によっては、行事の追加、日程変更などが船側と団役員の協議によって行われる。第41回海外研修航海の本研修の予定は43日間の航海であったが（2010年2月14日～3月28日）、ヌメア停泊中に発生した巨大なサイクロンによる海峡悪化により出港不可となり、現地にて12日間の停泊を強いられる事となった。従って、3月12日以降から講座、行事等の追加を含め、大幅なスケジュール変更となった。全体の変更点は、航海日数が50日間（2010年2月14日～4月4日）、船内での洋上講座が全18回（団長、副団長、望星丸事務長の特別講座）、行事が6回（追加行事のスポーツ大会II&合唱祭）である<sup>3)</sup>。

海外研修航海での研修学生の動向を調査する上で、研修航海中の生活を理解しておく必要がある。望星丸での生活は、船の規律に則り、常に団体行動が求められる。日常生活は、下記に記した洋上研修日課表（表1参照）に沿って進められるが、海峡状態、寄港時、船内行事等などによって日時が変更される。尚、上陸時は別途の日課表が適用される<sup>3)</sup>。日課表を見ると、起床時より様々なプログラムが続き、忙しい日々のように見受けられるが、研修学生は生活班、行事・調査グループと各自の役割が分担されており、生活班単位で行う食事当番の場合、6日間周期での担当となる。行事・調査グループは、各行事・調査発表前に準備が集中するが、それ以外の日程では自由時間となる。

自由時間などを過ごす船内の生活環境は制限された区域内に限られる。その範囲は決して広く無く、主に8人部屋に7人が生活する居室（例外居室有）、学生食堂、そして甲板となる。その他、許可が下りている場合により、艦

橋、エンジンルームなどに立ち入ることが可能である。従って、個々がプライベートの場所を確保する事は難しく、常に他人が周辺に存在していることとなる。

1日の大半を占める自由時間の過ごし方であるが、洋上と言う特殊な状況での活動が多く報告されている。土屋らは、船上生活での体験に関する1年後の印象について、自然に関する「星」、「夕日」、「朝日」、「鯨」等の印象が高かったとまとめている。その他、船上でしか体験できない「マスト登り」、「真鍮磨き」等、掃除の事柄までもが自由時間の過ごし方に含まれている<sup>4)</sup>。また、北濱は、多くの学生がヤシの実民芸品の作成とロープワークに自由時間を費やしていたと報告している<sup>2)</sup>。総評としても、学生は自由時間を積極的に、かつ楽しんでいたと報告されている<sup>4)</sup>。

表1—洋上研修日課表

時刻	研修学生	
	起床	
6:00	起床	
6:30	点呼・体操・清掃	
7:00	食事準備	
7:30	朝食	
8:00	片付け	
8:30		
9:00	洋上講座・外国語	健康状態の良くないもの以外は、参加
9:30	講座等	
10:00	洋上講座・外国語	講座等が無い場合は、自由時間
10:30	講座等	
11:00	食事準備	食事当番以外は自由時間
11:30	昼食	
12:00	片付け	
12:30		
13:00	予備調査・洋上講座等	健康状態の良くないもの以外は、参加
13:30		
14:00	予備調査・洋上クラブ等	研修学生を中心として行う講座等が無い場合は、自由時間
14:30		
15:00		
15:30	救急法	
16:00		
16:30	食事準備	食事当番以外は自由時間
17:00	朝食	
17:30	片付け	
18:00	自由時間、シャワー等	シャワーの時間帯は船側からの指示による
18:30		
19:00	行事準備	
19:30	ミーティング他	行事打合せ・準備・フリートーク等
20:00	班長会議	
20:30		
21:00	自由時間	
21:30		
21:45	点呼	班日誌・HP原稿提出
22:00	消燈	

### 3. 余暇（レジャー）の概念

本研究は、研修学生の余暇意識の動向を調査対象としており、ここで余暇の概念について定義しておく。余暇と leisure（レジャー）は、言語の違い（日本語と英語）として捉えられる事が多く、標記上でも同意語として扱われる事が多い。コルバンの『レジャーの誕生』訳者は、解説の中で、“*loisir*”の訳し方は、単数の場合「余暇」、複数では「レジャー」と訳すと述べている。他にも、ニュアンスの異なりはあるが、余暇をレジャーと理解してもよい<sup>5)</sup>と述べられている。これらを踏まえ、本研究では、余暇とレジャーは同意語として扱う（以後、余暇として記載されている場合は「余暇」として表記、レジャー（Leisure）と記載されている場合にはレジャーと表記する）。

洋上レジャー、或いは船舶でのレジャーと思えば、豪華大型客船にて、ゆったり・のんびりした時間を過ごすことが考えられるのではないだろうか。郵船クルーズ株式会社所有の飛鳥Ⅱであれば、レストラン&カフェ、ラウンジ&バー、エンターテイメント、アミューズメント、カルチャー、スポーツ&リラクゼーション、ショップ、デッキプランなど様々な施設が用意されている<sup>6)</sup>。本研究で使用した望星丸は、上記の様な各種洋上レジャーに対応した豪華大型客船では無い。望星丸は、学校法人東海大学所有の船舶で、国際総トン数 2174 トン、全長 87.98m、幅 12.80m、乗船定員（乗組員含）190 名で、海洋実習及び調査・観測のほか、学園全体としての海外研修航海、地域社会の青少年に対する海洋思想の普及活動を目的としている<sup>7)</sup>。

本調査の焦点である、洋上生活を通じた余暇、余暇意識の動向について記された参考文献は多くない。その理由は、本研究航海が他に類を見ない特殊な教育活動プログラムである事と、1968 年の第 1 回から 2010 年の第 41 回まで実施されているが、同じ日程、海況、乗組員、研修学生、団役員で行われる航海は一度も無い事である。従って、洋上生活の余暇、或いは余暇意識を定義するのは非常に困難を極める。そこで、生活環境は陸上と洋上とは異なるが、余暇（レジャー）概念は以下の Russell と高橋らが示している 2 つのレジャー定義を基本として考える事とする。1) Russell：一般的に自由時間、レクリエーション活動、そして、心の状態・特別な姿勢が含まれる<sup>8)</sup>。2) 高橋ら：時間、活動、環境の状況がよい程、豊富なレジャー経験を行うことができる<sup>9)</sup>。

上記した Russell、高橋らのレジャー概念には、自由時間、活動、環境などが定義されている。しかし、先に述べた研修航海中の生活では、陸上と比べて良いレジャー状況を有しているとは考えにくい。北濱の報告<sup>2)</sup>でも、船内での生活環境においては、空間、物品、生活時間制限が伴い、陸上での生活と大きく異なることも述べている。これらの制限は、研修学生に取っても精神的、体力的に大きな弊害であり、船内での余暇活動を考える上でも大きな要因となる。

しかし、研修学生は制限された環境の中でも自己を洋上生活に順応させ、普段体験し得ないレクリエーション活動を発見、活動していたとも述べている<sup>2)</sup>。第 33 回海外研修航海終了後 1 年後のアンケートでは、研修航海はよかった：100%、機会があれば再度研修航海に参加したい：76%、研修航海で自分は成長した：93%と海外研修航海について 1 年後にも関わらず好印象を持っている研修学生が非常に多いことが示されている<sup>4)</sup>。先に示した余暇（レジャー）概念とこれらの先行資料を踏まえ、第 41 回海外研修航海を通しての余暇意識動向を探る。

### 4. 研究方法

本研究は、学校法人東海大学第 41 回海外研修航海研修学生を対象に実施した余暇アンケート\*1 の集計結果を用いた。余暇アンケートは、どのように自由時間を受け止めて、送っているかを数値的に計るものである。尚、本研究で使用したアンケートは既存する余暇アンケート（ver.1.1.2）（全 40 問の 1～5 スケール）に記述質問を加えた余暇アンケート（ver.1.1.3 Kitahama Boseimaru）\*2 である。尚、今回の研究では、記述された内容に関しては触れない事とする。

#### 〈4・1〉 研究の目的

海外研修航海中（望星丸）での共同生活は、陸上生活とは大きく異なり、制約を受ける事となる。その様な生活状況の中で、第 41 回海外研修航海に参加した研修学生の余暇意識を調査する事を目的とする。研修学生の余暇意識動向は、事前研修、本研修中、そして研修後までを調査する。

#### 〈4・2〉 調査対象者

第 41 回海外研修航海に参加した研修学生 97 名を対象者とする。事前研修の欠席者（体調不良）、本研修中アンケート収集時の欠席者（船酔い等）、事後アンケートの返信は全対象者とは異なる為、アンケート対象者は 97 名とは限らない。尚、就職事情によりフランス領ニューカレドニア・ヌメアにて途中下船した 4 年生 4 名は、下船日前日の 3 月 17 日までのデータとし、6 回目アンケート以降は 93 名を対象者とする。

#### 〈4・3〉 アンケート収集方法

本研究に使用したデータは、事前研修から事後調査までの全 9 回が対象である。2009 年 12 月 25 日～27 日の 3 日間に渡り行われた事前研修 2 日目の 12 月 26 日、研修航海中の 2010 年 2 月 20 日・2 月 28 日・3 月 4 日・3 月 9 日・3 月 19 日・3 月 26 日・4 月 3 日、そして研修航海終了後に実施した郵送による事後調査の 6 月 4 日～6 月 30 日（当日消印有効）の全 9 回を対象とする（表 2 参照）。

研修中のアンケート収集日は、原則として寄港前日に行う「寄港地前調査発表」の後と設定したが、海況状態による船酔いが危惧された場合により、入港後に行った。アンケート対象者数、受講者数、回収率などは表 3 を参照してもらいたい。

表 2—余暇アンケート収集日

	アンケート 収集日付	備考
1 回目	2009 年 12 月 26 日	第 41 回海外研修航海 事前研修 2 日目
2 回目	2010 年 2 月 20 日	ボンペイ入港前日
3 回目	2010 年 2 月 28 日	フナフティ入港前日
4 回目	2010 年 3 月 4 日	ポートピラ入港前日
5 回目	2010 年 3 月 9 日	ヌメア入港日
6 回目	2010 年 3 月 19 日	ヌメア出港前日
7 回目	2010 年 3 月 26 日	コスラエ入港日
8 回目	2010 年 4 月 3 日	清水入港前日
9 回目	2010 年 6 月 4 日 ～30 日消印有効	事後調査 (郵送にてアンケート収集)

表 3—余暇アンケート対象者，受講者，回収率

アンケート	対象者		アンケート 受講者		回収率 (%)	
	全体	男子 (女子)	全体	男子 (女子)	全体	男子 (女子)
1	96	61 (35)	96	61 (35)	100	100 (100)
2	97	62 (35)	90	58 (32)	92.78	93.55 (91.43)
3	97	62 (35)	96	62 (34)	98.97	100 (97.14)
4	97	62 (35)	89	57 (32)	91.76	91.94 (91.43)
5	97	62 (35)	92	57 (35)	94.85	91.94 (100)
6	93	59 (34)	93	59 (34)	100	100 (100)
7	93	59 (34)	93	59 (34)	100	100 (100)
8	93	59 (34)	92	59 (33)	98.93	100 (97.06)
9	93	59 (34)	53	31 (22)	56.99	52.54 (64.70)

〈4・4〉 データ分析方法

アンケートによって得られたデータは、余暇アンケート集計の手順と解釈により分析する。集計方法は、1～24 までの設問を ILM-J (余暇に関する自発性の状況)、25～40 までを LBS-J (余暇における退屈さの状況) とし、互いの平均値を出すものである。ILM-J の平均値の解釈は、以下の 5 つに区分けされており、数値が低くなるにつれ、余暇に対する自発性が弱いと考えられる (表 4 参照)。逆に LBS-J の平均値は数値が高いほど、余暇における退屈感が強いと考えられる (表 5 参照)。

表 4—ILM-J (余暇に関する自発性の状況)

ILM-J 数値	余暇に対する自発性
3.9 以上	強いと考えられる
3.3～3.8	比較的強いと考えられる
2.8～3.2	混沌としている状態にあると考えられる
2.2～2.7	あまりないと考えられる
2.1 以下	ほとんどないと考えられる

表 5—LBS-J (余暇における退屈さの状況)

LBS-J 数値	余暇における退屈感
3.9 以上	非常に強いと考えられる
3.3～3.8	比較的強いと考えられる
2.8～3.2	混沌としている状態にあると考えられる
2.2～2.7	あまりないと考えられる
2.1 以下	ほとんどないと考えられる

5. 分析結果

〈5・1〉 ILM-J と LBS-J

全 9 回のアンケートから得たデータより、12 月に行われた事前研修から約半年後に当事後アンケートまでの数値を検討した (図 2 参照)。これによると、研修航海終了後は、男女共に ILM-J 及び LBS-J で肯定的な結果が出た。ILM-J: 1 回目の 3.391 が、研修終了後の 9 回目で 3.621 と 0.23 の上昇、LBS-J: 1 回目が 2.197 から 2.019 と 0.178 の減少を示しており、50 日間に渡る研修航海 (洋上生活) を過ごした事により、研修航海終了後の日常生活で余暇に対する自発性が高まり、余暇における退屈感が下がった。

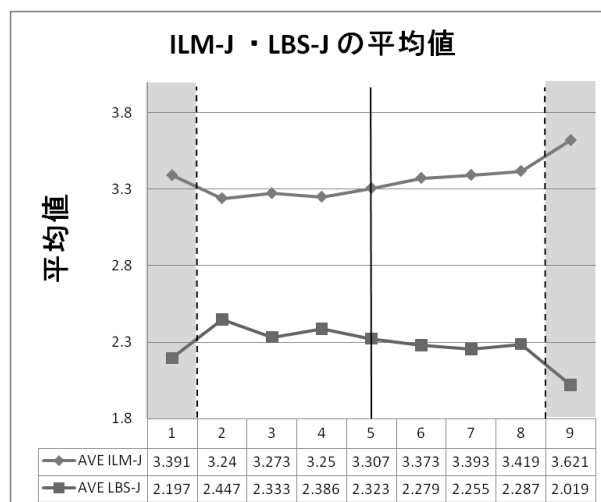


図 2—ILM-J と LBS-J の平均値

次に、洋上生活中のデータ変化である。ILM-J と LBS-J : 4 回目、LBS-J : 8 回目と 3 カ所の例外が含まれるが、全体的な ILM-J, LBS-J の数値は、清水出港後、余暇自発性が減り、退屈感が増えた。清水出港後、7 日間の船内生活を送った上で行った 2 回目アンケートでは、ILM-J の数値が下がり (3.391 から 3.24)、余暇に関する自発性が比較強い状態から混沌としている状態に下がった。同じく、LBS-J でも、大きな数値の変化が見られ (2.197 から 2.447)、余暇における退屈さがあまりない状況から混沌としている状況へと上がった。これらの数値は、異なった環境での生活が始まった事を意味しており、船内 (洋上) での余暇の過ごし方に戸惑っている事を現していると思われる。その結果、航海が進むにつれて、自発性は上昇し、退屈感は下降している。

### 〈5・2〉男子学生と女子学生の比較

ILM-J の全体平均値と男子・女子学生の平均値を比較すると、陸上生活を含む 1 回目から 9 回目までを通して男子学生は、全体平均値より値が低く、女子学生は全体平均値を上回っている (図 3)。研修航海前と終了後では、男子学生が 0.258 の上昇、女子学生が 0.169 の上昇である。全体を通しての最大平均値差は、男子学生が 0.378、女子学生は、0.403 であった。

洋上生活に限った場合においても (2 回目から 8 回目)、男子学生は全体平均より低く、女子学生は高い結果となった。尚、洋上生活での最大平均値差は、男子学生が 0.118、女子学生は、0.289 であった。

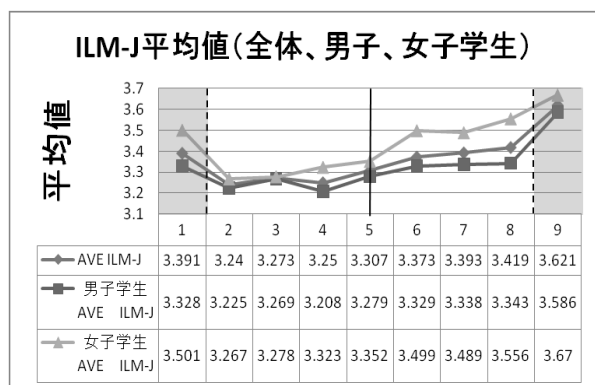


図 3—ILM-J 全体、男子、女子学生の平均値

LBS-J の全体平均値と男子・女子学生の平均値では、ILM-J とは正反対の数値となった (図 4)。男子学生は全体平均より高く、女子学生は低い数値となった。陸上生活を含む研修前後に渡る 1 回目から 9 回目の全体平均では、0.178 の減少、男子学生は 0.261 と女子学生の (0.081) 約 2.7 倍の変化が見受けられた。尚、全体を通しての最大平均値差は、男子学生で 0.388、女子学生では、0.463、と退屈さの度合い変化は ILM-J と同じ程度であった。

洋上生活に限った場合でも (2 回目から 8 回目)、男子学生は全体平均より高く、女子学生は低い結果となった。

洋上生活での最大平均値差は、男子学生は 0.161、女子学生は 0.271 となった。

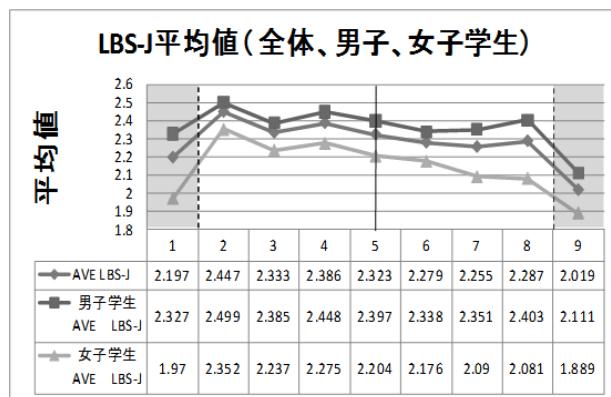


図 4—LBS-J 全体、男子、女子学生の平均値

## 6. 考察

本調査にて、海外研修航海を通して男女共に余暇に関する自発性は上昇し、余暇における退屈感は下降するという結果を得る事ができた。洋上、そして船内という特殊な環境の中における生活が始まる事によって、余暇に対しての意識は一旦低下するが、その後は、各自が新たな生活環境を受け入れ、余暇を自発的、そして退屈しないよう向上に努めている事が伺えた。特に、研修航海終了後は事前研修時より余暇意識が高まり、研修航海に参加する以前より余暇を享受していると言える。土屋らの報告にあるように、甲板清掃など学生にとって負の活動を意味するものまでを含み、学生は積極的に自由時間を過ごし、満喫していた<sup>3)</sup>。その他、土屋ら<sup>3)</sup>は、積極的な自由時間の過ごし方が、研修航海終了後の印象において「友人関係」が大きな部分を占める原因となったといえると述べている。研修の目的でもある「船内という限られた生活環境の中での共同生活を通して、人間形成をはかること」は、研修航海中の生活のみならず、自由時間の過ごし方、そして肯定的余暇意識向上にも繋がるものである。

全体を通して余暇に対して肯定的な結果が得られた中において、4 回目と 8 回目のアンケートの際に否定的なデータが示された。特に 4 回目アンケートでは、ILM-J, LBS-J 共に否定的なデータであった。これは、3 回目と 4 回目のアンケート収集の前後日程が理由の一つであると考えられる。4 回目アンケートは、3 回目アンケートから 4 日後に収集しており、その間にはツバル・フナフティへの寄港があった。生活時間の変更 (海洋・港湾の状況により入港時間の変更)、自由時間の減少 (フナフティダンス研修などを含み、団体行動)、ツバルの状況 (観光地ではなく、探索可能な場所が少ない、移動の多くが徒歩であった) などが否定的なデータを示す要因であると考えられる。LBS-J の 8 回目アンケートでは、7 回目アンケートより数値が上昇し (0.032)、退屈度が増えている。これは、当初の寄港予定日 3 月 28 日から大幅に延長、帰港日が定まら

なかった事、船内行事が帰港式を除き全て終了した事、海況状況の悪化による船酔い、結果的に1週間帰港が延期になった事などが理由だと考えられる。しかしながら、ILM-J 数値は7回目より0.026上昇し、自発性には肯定的な結果が得られている。清水到着、日本への帰国を次の日に控え、様々な余暇への自発、或いは欲求度の高まりを表している」と解釈できる。

その他、全体を通して女子学生は男子学生と比べて余暇に関する自発性が高く、退屈感は低いデータが得られた。

洋上生活での変化だけを見た場合、男子学生の余暇に対する自発性は(ILM-J)、洋上生活が始まった2回目アンケート(3.225)を下回ったのは4回目のアンケート(3.208)の一度だけであり、退屈感(LBS-J)においては、一度も2回目のデータ(2.499)を上回ることはなかった。女子学生の余暇自発性、退屈感は男子学生より顕著に表れた。

ILM-J・ILM-J共に2回目から8回目の間での数値変化はあるが、ILM-J:2回目(3.267)を下回ること無く、LBS-J:2回目(2.352)を上回ることはなかった。特に、ILM-J:5回目から6回目にかけて、女子学生の余暇自発性が著しく高くなった(3.352から3.499)。データ収集日を確認すると(表2)、5回目はヌメア入港日、そして6回目はヌメア出港前日であり、この大きな変化を得たのはヌメア港で停泊していた11日間であった。揺れない船生活、陸地に行くことのできる安心感から自発性が高まったとも考えられる。その他の理由としては、この11日間で、船上交流会、ニューカレドニア大学訪問、スポーツ大会Ⅱ、洋上卒業式、卒業生を送る会、グループ別研修など様々な行事が短期間で行われており、比較的忙しい生活を送る上で、余暇の自発性が高まったと思われる。

豊かなレジャー(余暇)経験を得る為には、より良い時間・活動・環境を求めると、異なった時間・活動・環境に身を置く事で、余暇に対する態度が大きく変化する。その場が満足行くものであるかは別として、余暇を享受する為に、各自の意識が変化する事となる。通常の生活に戻った時には、更に余暇に対する意識が芽生えている事も明らかになった。

## 7. 今後の課題

今回の調査により、研修航海を通して余暇意識の動向の詳細をデータとして現す事ができた。しかし、変化の詳細は不明であり、男女学生の差異、特に女子学生が男子学生より余暇に関する自発性が高く、退屈度の状況が低い点についても明確にすべきである。余暇アンケートと同時に収集した学生コメントより、データの確証をする必要があると思われる。

## 8. 謝辞

本調査を行う上で、研修日程の調整をして頂いた国際戦略本部と第41回海外研修航海団役員の皆さま、そして船酔いで厳しい状態においても余暇アンケートに協力して

いただいた研修学生に深くお礼を申し上げます。

### 脚注

- \*1 余暇アンケートは<http://leepnet.com>より申し込み可能  
野村一路・佐橋由美・茅野宏明：余暇生活設計のためのツール開発に関する研究(Ⅱ)、自由時間研究、21号、pp.40-49、1997
- \*2 余暇アンケート(ver.1.1.3 Kitahama Boseimaru)は北濱が第41回海外研修航海用に設問用紙と答案用紙を別にし、記述質問を加えたものである。

### 引用文献

- 1) 学校法人東海大学 第41回海外研修航海実行委員会：第41回海外研修航海 募集要項
- 2) 北濱 幹士：海外研修航海における研修学生の洋上レクリエーション活動—第39回東海大学研修航海より—、東海大学短期大学紀要、第42号、pp.101-105、2008
- 3) 学校法人東海大学 第41回海外研修航海実行委員会：第41回海外研修航海 研修のしおり
- 4) 土屋守正・斉木ゆかり・八木美樹・増島宏明・砂子克彦・緒方道朗：海外研修航海に関する学生の期待と意識について、東海大学教育研究所資料集、第12号、pp.179-197、2004
- 5) アラン・コルバン, Alain Corbin, L' Avenement des loisirs 1850-1960, Aubier, 1995; 邦訳『レジャーの誕生』, 渡辺響子訳, 藤原書店, 2003
- 6) 郵船クルーズ株式会社 飛鳥Ⅱ ホームページより  
<http://www.asukacruise.co.jp/index.html>
- 7) 海洋調査研修船「望星丸」ホームページより  
<http://www.scc.u-tokai.ac.jp/bosei/bousei/hp/index1.htm>
- 8) Russell, V.R. :Pastimes the context of contemporary leisure, p.55, Sagamore Publishing, 2002
- 9) 高橋一敏監修, 余暇問題研究所編著: 現代人とレジャー・レクリエーション, 不昧堂出版, 1997